

タカオがレコードをターンテーブルに乗せるのを待っていたかのように、玄関のチャイムが鳴った。誰が来たのかと訝いぶかりながらドアに向かう。モニターには中年の女性が写っている。同じフロアに住むタカミ・ヨウコだった。

彼女は四十代半ばの日本人で、いつも静かな笑みを絶やさず、品の良さを感じさせる女性だった。ところが、モニターに写るヨウコは思い詰めた表情をしている。

タカオは彼女を部屋に招き入れた。ヨウコにソファを勧め、コーヒー・メーカーのスイッチを入れた。ヨウコは会社から戻ってすぐに訪ねてきたのか、紺色のスーツのままだった。

「どづかなさったのですか？　あまり、顔色がよくないようですが」

タカオも椅子に腰かけながら尋ねる。

「ええ。私だけではどうすることもできなくて、どなたかに相談したいのですが、あなた以外には心当たりがなくて……」

彼女は話すべきかどうか思いあぐねているようだった。そのまま話し出すのを待っていても埒があかないと判断して水を向けた。

「私が警官であることがお役に立ちそうですか？」

彼女は肩でもつつかれたようにタカオを見ると、ぎこちなくつなずいた。

「分かりました。」ご相談をお聞きしましょう。むりに話を整理しなくても結構です。話せることからいいんです。あとで補足したり、話が前後したりしても構いませんよ」

タカオはコーヒーを取りに席を立った。ていねいに時間をかけてカップにコーヒーを注いでからヨウコに手渡した。ヨウコは礼を言って、カップを手に持つとコーヒーを見つめながら話しはじめた。

「じつは、娘のことなのです。娘は今年十七になるのですが、その娘が家出したのです……」。

いいえ、家出というのはおかしいですね、私が独り暮らしなのはご存じですから、変に聞かれますね。私は十年前に離婚したんです。娘は夫のジャックが引き取りましたけれど、月に二回は会うことが条件でした。それで、先週の金曜日は来るはずだったんですが、夜になっても来なくて。今まで、そんなこと一度もありませんでした。来られないときは必ず連絡をよこしますから、私も心配になって……。ジャックのところへ電話をかけたなら、逆に、木曜日から私のところに泊まっているのではないかと聞き返され、それで、気が動転して……」

「家出だと思ったわけですね」

「そうですね」

「そこまで言うとは、ヨウコはタカオを正面から見つめた。涙がうつすらと滲^{にじ}んでいる。

「お嬢さんは、あなたのところに行くと言って、家を出たのですか」

「いえ、ジャックは出張中だったそうで、その出張から戻ると家にいなかったそうです。ただ、その日が木曜日だったので、一日早く、私のところに泊まりに行ったのだらう」と

「前にも同じようなことがありましたか？」

「ええ。父親が出張に行くから泊まりに来ると言って、電話してきたことがあります。一人で家にいるのが好きではありませんでしたから。幼いときから寂しがり屋なんです」

ヨウコがハンカチを取り出して涙を拭いた。

「それで、どうしました」

「まず、落ち着こうと自分に言い聞かせて。それから、娘の友達に聞いてみようと思いましたが、何人かに電話したのです。でも、その子達は娘が幼い頃の友達ですから、要領を得なくて……。ジャックもクラスメートに電話したらいいのですが。父親ですから、どの子と親しかなんて分からないと……」

「捜しよつがないわけですね。警察には届けを出しましたか？」

「もちろん、出しました。連絡があるかと一晩じゅう待っていたのですが、私にもジャックにも連絡はありませんでした。それで、彼が警察に届けを。でも、警察では、手配はするが専門に捜す部署があるわけではないから期待しないでほしいと言われたそうなんです」

「残念ながら、それが現実でしょう。この街だけでも、家出したり行方不明になる子ども達

は年間で千人近くいますから。これが誘拐ということでも身代金の要求でもあれば話は別ですが……。ただちに重犯罪課を中心としたチームが編成されます。単なる家出であれば、パトロール警官に情報を与えて、注意を促すのが精一杯です」

「可能性が低いのは分かっています。だから、ジャックは私立探偵を雇うと言っていました」

「そうですね、家出した少年少女を専門に探す探偵もいますからね」

「でも、それはジャックがすることなのです。私にはそんなことできませんし。何もできないなんて、母親として耐えられない。それで、あなたのことを思い出したのです」

「私を？」

タカオは少し身構えた。ヨウコが自分のことを思い出す理由が思いつかなかった。

「しばらく前に、ビルの店でお会いしたとき、サンダースさんが暇を持って余っているとおっしゃっていたのを思い出して……。それに、私が唯一知っている警察の方だし」

タカオは苦笑した。確かに、あのときは自嘲気味に暇だと漏らした記憶がある。彼は資料

課に所属していたので残業もさほど多くはなく、中間管理職としての仕事を持て余していると言ったつもりだった。

「やはり、駄目なのでしょうが」

タカオの沈黙を誤解したヨウコは、なかば諦めたような口調で尋ねた。

「いや、待ってください。困ったな。暇とはいっても、仕事がないというわけではないですよ。少年課の連中に頼むことはできますが、それで捜査リストの順番が繰り上がることはないのです」

「ビルがあなたのことを凄腕だと言っていました。強盗をあっという間に取り押さえたとか。階級も上のほうで、警部補といったかしら……。部下の方とかもいるのでしょうか」

ビルのおしゃべりめ。彼の食料品店で買い物をしていたとき、強盗を右腕一本で叩き伏せたことがあった。あの一件以来、何かとサービスしてくれるのはいいのだが、こんな女性にまで吹聴しているとは。

「それは、昔の話です。階級は管理職を示しているだけで、たいした意味はありません」

「そんなんですか……」

彼女は、視線を落として嘆息ためいきをついた。タカ才は困惑した。頼られることは嬉しかったが、資料課の勤務を放棄するわけにはいかないし、そもそも資料課の警官に捜査する権限はない。だが、頼る相手がいないヨウコに対して、なんのアドバイスもせずに追い返すような薄情なまねもできない。

「分かりました。こうしましょう。仕事を終えてからの時間と非番の日を使ってお嬢さんを捜します。ただし、期間は一カ月。家出した子どもを無事に保護できる期間です。それ以降は正直言って、運次第です。ご主人の雇った探偵とも協力してみましよう。ひと月捜査して見つからなければ、あとはその探偵に任せる。それでいいですか」

ヨウコの顔が期待にほころぶ。

「ありがとうございます。なんとお礼を言っているのか……」

「いや、まだ見つかったわけではありません。まず、お嬢さんのことを詳しく聞かせてくだ

ね」

「ええ、分かりました」

彼女は、ポーチから一枚の写真を取り出した。

「これが娘です」

その写真は学校で撮られたものだろうか、同じ年頃の少女が四人写っている。日系人は一人だから、まんなかに写っている少女がヨウコの娘だろう。長く伸ばした黒髪、切れ長の目。瞳は微かすかにグリーンを帯びている。高く、はっきりとした鼻梁びりょう。日本人の血を色濃く引きながらも、全体的には白人のイメージを持っている。少女が女に変わりつつあるときの微妙なバランス。まさしく、彼女は十七歳の少女であった。

ヨウコは、テーブルに置かれた写真に目を落としながら、娘のことを話しはじめた。タカオはPDAにメモを取っていく。リサコ・ファーガソン、セント・ヨハネ・ハイスクールに通う十一年生。そこで、タカオの手が止まった。

「ファーガソンというと……、もしかしたら、元のご主人というのはゼウス・ジェネティック・システムズ社のジャック・ファーガソン氏ですか？」

「ええ、そうです。彼のことをご存じでしたか？」

「もちろんですよ。バイオ・ビジネスの革命児 を知らないはずがない。驚きましたよ。あのファーガソン氏のお嬢さんとは……」

「彼の娘だということ、誘拐なんてことには……」

タカオの言葉でヨウコが不安そうな様子を見せた。むりもない。営利目的の誘拐は、この国ではビジネスになりつつあるといっても過言ではない。

「いや、逆に誘拐ではないと言えるでしょう。彼ほどの有名人の身内を誘拐したのなら、とつくに犯人から連絡がある」

タカオはヨウコを安心させ、先を促した。

リサコは身長五フィート五インチ、体重一一ポンド、黒髪、瞳はグリーンがかった茶色、特に目立った傷痕やほくろは顔にはない。二年前に飼犬のソックス といっしょに交通事故に遭い、大きな怪我を負っている。だから、注意して見ると右足を少し引きずるような歩き方をする。学校の成績は中位。性格は明るいが寂しがり屋のところがある。過去の非行歴

はなし。ロックグループ スパイラル の熱狂的なファン。

彼女のどこが、ほかの十七歳の少女と変わりあるのだろうか。有名企業のオーナーの娘だからといって、十七歳の少女の本質的な部分が変わりはいしまい。何百人という家出少女のプロフィールと入れ換えたとしても、違いを見つけることはできない。タカオは何か分かれば、そのつど連絡するとヨウコに言った。ヨウコはずいぶん落ち着きを取り戻した様子で部屋をあとにした。